

平成 17 年 2 月 12 日

日本白鳥の会 豊科大会 発表要旨

フライウェー湿地間の交流について～環日本海交流の変遷（米子水鳥公園）～

神谷要 （財）中海水鳥国際交流基金財団

米子水鳥公園を管理する（財）中海水鳥国際交流基金財団は、水鳥に関する環日本海交流を目指して平成 7 年 3 月に鳥取県米子市に設立された財団である（Kamiya2001）。

湿地保全という考え方において、国際的視点は重要であるが、しばしば各国の国内的な問題ととらえられがちである。しかし、その湿地間を移動する渡り鳥にとって、湿地の地理的国際的な連続性は重要な問題であり、そのためにラムサール条約が締結されている。

また、湿地保全のためにラムサール条約の勧告や決議を引き合いに出すまでもないが、湿地間の国際的交流は、それぞれの国で保全に関する知識や経験の交換だけでなく、地域の住民の意識を変える重要な役割がある。

今回、中海財団では設立以来過去 10 年間に渡って行ってきた国際交流について振り返り、今後の展開を考える。

湿地間の鳥に関する国際交流の考え方の 1 つとして、2002 年に中海財団が行った聞き取り調査（神谷 2003）は有用なものであり、これを中心に考えてみたい。この調査では、交流内容と対象国について調査している。交流内容については、調査・講演会・国際会議・研修生の受け入れ・市民交流等の大別がなされている。

中海財団は、過去十年

において、この全ての項目のタイプの交流を実施しており、特に NGO との連

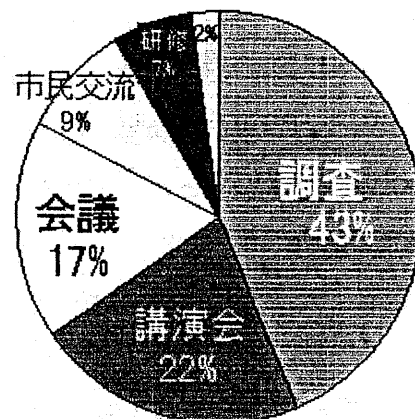


図 1.野鳥に関わる国際交流の実施内容

日本の白鳥 27:80-81 追加の図

帯や、調査の成果などが多く出ている。

これに対して、相手国は、アンケートでは、ロシア・中国・韓国・アメリカの順であったが、中海財団では、その殆どがロシアと韓国の2つに大別され(神谷,ホヰドニャコフ 2002,神谷 2002a,神谷 2002b, 神谷 2005,神谷,イ 2005)、その他の国は殆ど絡んでこない。これは、環日本海交流という意味でこのような制約がかかってしまったのかもしれないが、今後、考慮が必要であろう。

また、中海財団が行ってきたこの国際交流の成果として、中海が国際的に重要な湿地として2005年中にラムサール条約に登録される見込みとなったほか、市民のボランティアの増加など地域の誇りとしての評価が高まったことがいえる。

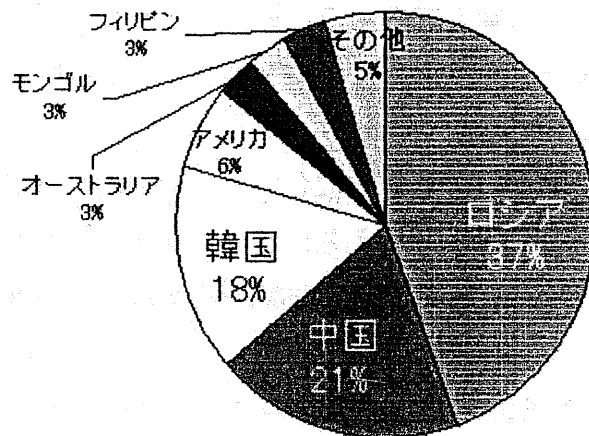


図 2.野鳥に係わる国際交流の相手国

日本の白鳥 27:80-81 追加の図

参考文献

Kaname Kamiya: The activity and organization in Yonago Waterbirds Sanctuary. Anet Newsletter 2:4, 2001.

神谷 要・ウラジミール・ホズドニャコフ: 米子水鳥公園とレナデルタの国際交流とコハクチョウへの首輪標識日本の白鳥.26.10-19,2002

神谷 要 a: ロシア・サハ共和国レナデルタ調査報告 ALULA : 23.6-9, 2002.

神谷 要:b 米子水鳥公園とレナデルタとの国際交流活動. 第2回ラムサールシンポジウム新潟報告書 : 73-80, 2002.

神谷 要:日本における野鳥に関わる国際交流に関するアンケート結果.日本の白鳥.27.80-81,2003

神谷 要:国際交流講演会「渡り鳥のつなぐ世界」～米子水鳥公園におけるロシアとの国際交流,2004～.日本の白鳥.29.(投稿中),2005

神谷 要・イ・チャンウ: 韓国釜山広域市周辺(ナクトンガン流域)におけるオオハクチョウの生態.日本の白鳥.29.(投稿中),2005